

「世界で一番好きな男と結婚することの不幸」

「序 文」より

結婚生活とは冷蔵庫のようなものです。

雨で買い物に出かけられない時、私は冷蔵庫をあさり、そこに残された材料で何をつくらうかと頭をひねります。

クズ野菜をうまく調理して素晴らしいご馳走をつくり出せる時もあれば、せっかく上質の牛ヒレ肉があっても火加減を間違えれば、焦げ臭くてとても食べられません。

夫という人物は、冷蔵庫に残された食品材料であります。つまり、こちらの腕次第で、おいしくも不味くもなるのです。

欠点が目につき、どうしようもなく駄目な材料に思えても、手を加え調味料で味つけすれば立派な一品料理になります。

世間から見て、何の非の打ちどころのないエリート男性でも、妻が「夫は仕事でちっともかまってくれない」

と愚痴をこぼして毎日責め立てていると、牛ヒレ肉を焦げつかせることと同じことになるのです。仕事がうまくいなくて沈んでいる夫に対しては、明るくジョークを飛ばす妻でいたいものです。しぼんだレタスも水に浸せばパリッと元に戻るのですから。

そうして、他人の冷蔵庫を決して羨ましがらないことです。うちの食事がおいしくないのは材料がよくないからだわ、あたしだってもっといい材料を与えてくれたらおいしいものをつくれるのよなどと考えるはいけません。

限られたものの中で工夫して、そしてより高いものを目指していく——これが結婚生活の技術ではないでしょうか。

今読み返してみても、間違ったことは言っていません。しかし、なんとまあ甘かったことよ、というのがこの年になっての正直な感想です。

当時、この文章を読んだ人の多くが、「著者である柴門ふみは結婚生活の技術を巧みに実践しているのだな」という印象を受けたことでしょう。でも実際は結婚当初に掲げた理想に過ぎません。のちに私は「こんなはずではなかった」と、結婚生活の理想と現実のギャップに何度もぶち当たることになるのです。

どんなに幸せそうに見える人も、それはその人の幸せな側面を見ているだけ。女同士の話は赤裸々だといいますが、あけすけなようできて話せるのはここまで、という線引きはハッキリしているように思います。家庭の事情は他言しないと決めている人も大勢います。ママ友や仕事仲間のおつきあいの中ではもちろんのこ

と、心を許した友人や姉妹にさえ。

世間体や心配をかけてはいけないという思い、愚痴ったところで問題が解決するわけではないのだという諦めから、人の抱える悩みは表には出て来ないだけで、現実的には、問題のない結婚生活を送っている人などいないといえるのではないのでしょうか。

それなのに、なぜ時々私は追い込まれてしまうのか？

答えは簡単で、夫がいい人であることと結婚生活の不満は別問題なのです。無茶苦茶なことなど言うてはいません。「あのご夫婦は離婚をしたらしい」という噂を耳にしたときに、「ご主人も奥さんもいい人なのに」と感じるのもよくある話です。

とにかく夫がいい人であっても不満は生じます（何度も繰り返しますが）。だから「ご主人はいい人なのに、一体何が不満なの？」と追及されても困るのです。「あなたは我がままだ」と遠回しに指摘されても納得がいかないのです。結婚生活は、そんなに単純なものではないと私は声を大にして言いたいのです。

1970年代に「専業主婦」の数はピークに達し、私が思春期を迎えた頃に流行していたのが「クリスマスケーキ」という言葉。

世間では、クリスマスケーキを結婚適齢期に喩えて、イブの24日（24歳）までは強気の価格でどんどん売れる、25日（25歳）は定価でまだまだ売れる、26日（26歳）は半値なら売れる、賞味期限の過ぎた27日（27歳）はタダならなんとか、大みそか（30歳を過ぎたら）にはタダでも売れない、などと言われていたのです。

かくいう私は椿山荘で神前式を挙げました。

キリスト教式での「誓いの言葉」にあたる「誓詞奏上」を思い出し、そもそも誓いの言葉には無理があるのではないかと、などと思うのです。

結婚式での誓いの言葉は、「今このような言葉で誓うことができないような結婚ならすべきではない」という、いわば最終確認。そんなふうに私は認識していたので、あの日、あの時に「はい」と答えたのです。

ただ今になって思うのです。だからといって永遠の愛など誓えるものではない、諸行無常が世の常なのだからと。

いずれにしても恋愛結婚の離婚率がお見合い結婚の離婚率に比べて高いのは、恋愛結婚をする人の多くが、恋愛感情が永遠に続くと思っている、つまり**恋愛の延長線上に結婚があると捉えている**からなのではないでしょうか。

恋愛と結婚は別なのです。

恋愛は「あなたが好きだ」という気持ちだけで成立しますが、結婚は「好きだ」という感情だけでは成り立ちません。

私は33歳の時に出版した『恋愛論』という本の中に、「恋愛ほど美しいものはない」と書いていますが、じつは恋の正体は性欲なのです。性欲を美しく衣付けしていただけなのだ、60歳を前に性欲が枯れてきてはつきりと私は認識しました。

その後も投稿熱は過熱していく一方で、やがて「サイモン・準子」という投稿ネームを持つようになったのは、サイモン&ガーファンクルの、特に**ポール・サイモンのファン**だったから。

因みに「柴門ふみ」というペンネームは、漢文の授業で習った李白の詩で、「柴門」をサイモンと読むのだと知って当て字を思いつきました。

とはいえ、恋愛パターンの中で③の「両想いで結婚する」が理想的だと盲信することが、じつは危ないのです。結婚はしてみないとわからない。ここに人生の大きな落とし穴があるのです。

結婚生活の中で妻が直面する夫婦の苦勞には、健康に関することや、経済的な問題、夫の女性問題、モラハラやDVなどいろいろあります。これらアクシデントに見舞われた時に受ける衝撃も大きなものですが、最も大きな打撃は、結婚の幻想に縛られて結婚した挙句に目の当たりにする現実だと思います。

これで大好きな人と毎日一緒にいることができるのだから私は幸せだ、彼は私だけのものになった、もう私は一人じゃない……。すべて幻想です。

恋人のままでいれば二人の関係は続いていたかもしれないという話をよく耳にします。一緒に暮らさなければよかった。たまに会う人と毎日会う人とでは、同じ男性であってもまるで別人のようだった。たまに会う関係で多少の距離があれば、いつまでも相思相愛でいることができたはずなのに、と。

男は女に比べてすぐに忘れる脳だということもよく耳にします。

一般に、夫婦で大喧嘩をして互いに罵り合っても、夫の記憶は日毎に薄れ、抱いたはずのネガティブな感情が続かない。ところが妻は夫と交わした会話のみならず、その時に抱いた感情までしっかりと覚えていて、夫と向き合うたびに記憶を蘇らせているのです。

とはいえ、離婚の要因の上位を占める借金や浮気といった出来事は、きっかけにはなっても、多くの離婚の直接的な理由ではないように思うのです。

日常生活の中で、妻は夫に対する不満を「一つ、二つ……」と数えているのではないのでしょうか。「あの時、夫は私を見下すような発言をした」「彼は私の親の介護の時に、何もしてくれなかった」「夫は子どもの運動会に来なかった」……。一つひとつの出来事は些細なことでも、何百個も重なれば深刻な問題と化します。

しかも妻が夫に対して抱いた不満は永久不滅ポイントなのです。

夫はマイナスポイントを作るたびに、それなりのフォローをしているつもりかもしれませんが、プレゼントを貰ったり、ちょっと家事を手伝ってくれたところで、妻にとってはソレはソレ、コレはコレ。マイナスポイントが消えることはありません。

「俺だってちゃんとやってるじゃないか！」も、日本の夫たちは必ず口にします。

夫のスタンスは、あくまでも「家事の手伝い」であって、「家事の分担」ではありません。だから「俺は手伝ってやってるじゃないか」と恩に着せている気配がプンプンする。それがまた妻を怒らせるのです。

妻の対人関係や仕事関係での愚痴に対して「それは君が悪い」という反応を示すのも、世の夫たちに多く見られる傾向です。

女は「なんで私に厳しいの?」「なんで私を突き放すの?」と感じてしまいがちですが、男は「役に立つ冷静なアドバイスをしてやっている」と考えているのです。

私も若い頃にボーイフレンドから「それは君のほう間違っている」と頭ごなしに言われた覚えがありますが、一方的に否定されると不快な感情しか湧かなかったのを覚えています。

「〇〇ちゃんのパパは、会社から帰ってきたら必ずキャッチボールをするんだって。△△ちゃんの家では、休日の夕飯はパパが腕を振るうのですって」

と、何気なさを装って夫に話したのは、もちろん夫に伝えたいことがあったからです。「あなたも子育てに参加してほしい」という思いを胸に、「他の父親がそうなら、自分もやらなくてはいけないな」という夫の言葉を期待してのことでした。

ところが夫から返ってきたのは、「暇な男がいるんだな」という驚情の一言でした。

しかも、後に夫が雑誌のエッセイに、「仕事のできる男は家事も子育てもしない」と書いているのを知って納得したという次第です。

この話を知人女性にしたところ、彼女から「そもそも男は、比較されると意固地になるのよ。だから他者と比較してはダメ、それから昔と比較するのもダメよ」と言われました。

ある時、彼女が投げかけた「昔のあなたはもっと優しかった」という言葉に、夫が過剰に反応したというのです。

「普段は比較的穏やかな人なのだけれど、自棄に興奮しちゃって。『君だって昔はあんなにスリムだったのと言われたくはないだろう？』なんて言うものだから、そこから大喧嘩よ」

売り言葉に買い言葉とはこのこと。どうやら比較論は、踏んではいけない男の地雷だといえそうです。

ところが今、人づきあいが年を重ねるごとに希薄になってきているのを実感しています。

子どもから手が離れてからの五十代の前半は、「歌舞伎に行かない？」「行く行く！」「温泉に行かない？」「行く行く！」と、互いにノリのよかった女友達。でも、このところ、めっきり誘い合うことが少なくなりました。

これは夫の存在とは無関係に、女も体力・気力の減退によりマメでなくなることが原因。イベントを持ち掛けたほうは「じゃあ、ここで何時ね」「この列車を手配するわ」と幹事役を務めなくてはなりません。複数で集うとなると一仕事。それが億劫で、自分から言い出してまではいいやとなってしまうがちになります。

誰もがそう感じているわけですから、結果として企画が持ち上がらず、疎縁になる一方だというわけです。

昔は「せっかく声をかけてくれたのだから、一応顔を出しておこうかな」という精神的なゆとりもありました。でも今は、浮世の義理はもういい、私は会いたい時に、会いたい人にだけ会うのだと決めています。これも私に限ったことではないでしょう。

「何を言う！ 私を見てごらんよ。金なし、職なし、男なし。それでも明るく生きている」

とって、ガハハと豪快に笑ったのです。その瞬間に私は救われました。私の子どもが欲しいという望みも、仕事をしたいという希望も叶えられた。これ以上贅沢をいって罰が当たると気づくことができたからです。

もしもあの時、「そうだね」「可哀想に」と共感や同情をされていたら、自分の人生はうまくいかない、悶々としたまま過ぎていたかもしれない。そう考えるとその友人には心から感謝します。

結局のところ、笑ったもの勝ちなのです。

今も親しくしている彼女は、人生を楽しむ天才。その後結婚し、お母さんになりましたが、「パパはカッコイイのに、どうしてママと結婚したの？」と辛辣な質問を投げかける娘に、夫が「ママといれば、一生笑って暮らせると思ったんだ」と言ったというほどのユーモアセンスの持ち主です。